

当事者の声

『ふるさと』
曾根 朗

今は消えていった。ふるさと昔
あったけど、今はない。
今生きている人、昔亡くなっ
たひとたち、建物もあつたり
なかったり。
子どもの時の風景も変わって、
だいたいなくなつた。
昔ほど笑うこともへつてきた。
友も変わっていき、昔好き
だった人もいなくなつた。
母も亡く、父も亡く、一人に
なつた。
昔愛した人は家族をきずき離
れていった。
多くはそうだ、人生で失つた
ものは多い。
今はふるさとで泣く泣く暮ら
している。
今、ふるさとで愛したひとた
ち、どこにいるのだろうか。



太郎のマンガ



濱田 繁雄

お願い ~賛助会員になってください~

NPO法人そよかぜねっとは、精神しょうがいのある人たちが安心して、自分らしく、自立して暮らせる地域創りを目指し、就労継続支援B型事業「やすらぎ工房」の運営、啓発・広報、地域交流活動を行っています。一人でも多くの方のご理解とご支援を願っています。

年会費：個人2千円・団体3千円
(会費は、法人の運営費に充当されます。)
~ご賛同頂ける方は、下記電話までご連絡ください~
払込用紙(手数料不要)を送らせていただきます。
☎ 0794-85-9990 ・ FAX 0794-60-4533

編集後記

緊急事態解除の現在、普通の日常が戻るかなと安心できない感染第二波、第三波が伝えられる。“ステイホーム”の知恵~我が家に見直す居場所探しは人それぞれである。それは他人から指示されることではない。
しかし、一歩外へ出ると決まったように「ソーシャルディスタンスを保て」との沈黙の空気が流れる。健康と命を守るためにやむを得ない面もあるが、ひとりひとりが考えて、必要な行動と方法をとることが、病や障害を抱えながら生きるしかない、弱い私たちと仲間を支えるに必要と切に思うこの頃です(伊東)。

密を避ける、コロナの行方...と何かと気持ちが落ち着かない日々が続いています。その中で、家での私の今の癒しは100均でgetした観葉植物です。思ったよりもスクスクと育ち嬉しくて眺めては幸せな気持ちになっています。そんな私をざわつかせる事件が！観葉植物の有機肥料で小虫が発生。いたちごっこのような戦いの日々。土を変えたり忌避剤を活用したりと日々新しい発見があります。
最近ではアプリで、購入したレモンから発芽させ育てる方法検索に夢中。ひらきこもりが板についてきました(北上)。

就労継続支援B型事業所
やすらぎ工房

〒673-0521 三木市志染町青山1丁目26番地
☎ 0794(85)9990 FAX 0794(60)4533
mail: yasuragi-koubou@maia.eonet.ne.jp
URL: http://yasuragikoubou.main.jp/

コロナ禍の下で

理事長 伊東 久雄

初めての体験

コロナパンデミックによる緊急事態宣言下、やすらぎ工房も障害者就労支援のための軽作業での「三密」を避けるため、やむを得ず、通所者の通所日数と職員の勤務日数を制限しなければならず、県に休業補償を請求している。全国で行政の要請に応じて、厳しく事業・勤務制限が実施され、なかには、その日の糧も危ういと悲鳴も聞こえてくる。

去年末、中国で発生した感染症がこれほどのスピードで全世界に拡散し、足元の日常にその危機が来るとはだれも予想しなかったこと。しかし、歴史を振り返れば、第一次大戦の犠牲者よりはるかに多い人が犠牲になった百年前のスペイン風邪、ヨーロッパの三分の一の人たちが亡くなった中世のペスト、さらに農耕始まって以来、ウイルス感染は文明とともにある。しかし、日本の高齢者も若きも、歳にかかわりなく、これほど身近に命と健康のリスクが迫ったことは、生まれて初めてのことでないだろうか。

すべては千載一遇だった

緊急事態宣言で家に閉じこもりがちな日々、次に恐縮ながら私事から考える——物置を片付けていると、45年前に書かれた弟の日記を見つけた。彼は奥穂高の錫杖岳で滑落死、その三日前の山行メモもある、そして「人生の岐路に立ち、悶々とするばかり、答えはいまだ出ず——」と青春の悩みを記し、懐かしさでいっぱいになった。日記は自分のために書く。だから正直におのれを語る。弟の山行記遺稿集を仲間の山岳クラブが出してくれた。この頃、ある文学同人誌のつながりで親しくなったKさんは弟と生まれ年は同じ、70歳代になったKさんに会うたびに、もし弟が生きていたら——と想像してしまうことがある。——ああ、すべてははかり知れない千載一遇(千年に一度ほどのチャンス)だったのだと後から実感する。

イタリアから

死者数が3万人を超えているイタリアで、新聞紙上で連日亡くなった人々、一般市民も実名で追悼する特集面が掲載されているとの記事(「朝日新聞」5.21)を読む。「2月下旬、中国に渡航歴のないイタリア人男性らの集団感染が初確認されたが、この男性の訪れた場所が詳細に報じられたものの、訪問先や男性の勤務先が差別や中傷を受けることはなかった」

日本ではどうだろうか。たとえば、必死に治療している医療関係者の子供保育が敬遠された、感染者の出た家族のいる労働者が職務上不利益を被った例が聞こえてくる。命の危機が迫ってくる時、個人や社会の在り方があらわにされてくると思う。

慣れ切った日常を見直す機会

月刊誌〈選択〉三月号によると、「地球温暖化の最悪のシナリオとして、WHOは昨年の報告書で“抗微生物薬耐性の脅威”を挙げ、人類は抗生物質発見以前に逆戻りする可能性が高い」と記しているNHKBSテレビ(5.28)でも、「不死身のスーパー耐性菌」によって病との闘いが危機に直面、人類の未来へ警告している。「人間はいかなることにも馴れる動物である」(ドフトスキー)から、いま、慣れ切った、私たちの将来に無関心になりがちな日常を見直す機会に！
(2020.5.30記)



加西市で開催された「心の病家族教室」(2019.11.29)で発表して

知ることの大切さ

ナギー

10年前広汎性発達障がいと診断され、やすらぎ工房に通所4年目になり、生活リズムをつくっている。2年前から障がい年金を受給して一人暮らしを始め、昨秋から生活保護を受けている。住居補助が3万2千円限度が三木市では条件となり、市営住宅の空きを待っている。自治体により4万円までの所もあり、住宅援助が何とかならないだろうか。

学生時代、瀬戸内海の療養所や阪神間に住む元ハンセン病患者との交流を通して「隔離」の実態と地域の対応を経験した。その病が感染しないことが明らかになった戦後も隔離が続き「断種」や「墮胎」そして地元の家族への差別も繰り返された(加西研修会で市長がそれにふれたので喋らなかった)。読書、特に歴史関係が好きだが、最近あまりその暇がない。世の流れから正しく知ることの大切さを感じるこの頃です。また、今思い出すと研修会初めのアトラクション、当事者が演じた音楽が印象的でした。

—生活を見直すチャンス!—

理事 片山 操代

「自粛」モード一色のコロナ禍で、我が家も変わるべきと、「ステイホーム」の生活に切り替えました。重度知的障がい者の息子は生活介護事業所通所とグループホームでの生活を自粛、在宅生活を実行することに……。

★本人の目標・・・自分で考えて一日を過ごす(一日をデザインする)

★親の目標・・・指示ことばを控える(これが大変!今までを反省!)

「起きなさい」などのことばは禁物!「ゲームをしている時間が長いなあ」と思っても我慢、我慢。「お風呂に入る?入らなったらお父さんが先でいい?」と言い方も工夫。時間がたっぷりあるからこそできる関わりです。お陰で最近は本人から「お先に」「お待たせ」などのことばが自然と出るようになりました。ゆっくりの暮らしで得た物もあるかも……。

カブト虫ペアを無料でプレゼント!

今年はコロナ感染予防のため青山の夏祭りも残念ながら中止となってしまいました。恒例になっていましたカブト・クガタの販売も行えなくなってしまいましたので、この機会に、日頃のご理解とご協力に感謝して、カブト虫のペアをプレゼントいたします。(先着20名程)

日時:8月3日(月)10:30~12:00頃 場所:やすらぎ工房玄関付近

子どもさんやお孫さんにいかがでしょうか?お待ちしております

あきらめないこと

北園純也

参加者の前で、初めて意見発表した一人として、当日同じ当事者の話された物語から、何より人それぞれの問題をかかえ、家族との関係や将来への考え方が様々と実感、司会者彼谷さんの活動を含め、あきらめないことの励ましを得ました。

私の場合、昼夜逆転の生活から現在やすらぎ工房に通所してリズムある生活を送っている。将来、母亡き後の経済的不安や生活していく不安などありますが、福祉サービスなどを利用しながら生活している人たちの姿を見て、自分も安心して生きていきたいと思います。幼馴染の知人の親子さんから相談を受け、引きこもりで悩んでいるとこのことで工房所長から資料をもらって、一日でも早く社会につながるようにと望んでいます。

ともあれ、「将来の自立に向けて」のテーマでの事前打ち合わせも入れて、ともに考え表現したことはよい経験になりました。

当法人の事業報告書・決算報告書はNPO法人ポータルサイトで閲覧できます。

検索 [NPO法人そよかぜねっと] 検索

ホームページは [やすらぎ工房三木] 検索 が楽です。

『新たな生活スタイル』

職員 長 ひろか

コロナ自粛で外出できない中、どのように自宅で過ごしてきたかを振り返ってみる。

- ①普段、後回しになりがちな所の掃除(ベランダ・玄関等の外回り)
- ②天気の良い日には布団を干し、シーツの洗濯
- ③普段、取らない友人への連絡
- ④ウォーキング(20分)

以上の内容をメインに、部屋の換気、手洗い、うがい、アルコール消毒等の衛生面の徹底を行う。

自然と規則正しい生活を送れていたように思える。一日の流れをルーティン化すると、意外とストレスも軽減されるのかもしれない。

これまで、「ワークライフバランスが大切」とうたわれて久しいが、今後は仕事、プライベートに加え感染予防対策と共にバランスを保つことも日常的に重要になり、これからのコロナ時代に向けて新しい生活スタイルが求められることになりそうである。

グループホーム「そよかぜはうす」開設

施設長 北上 亜矢子

令和2年6月1日、グループホーム事業がスタートしました。定員はショートステイ含め6名です。約4年前から、事業開始に向け検討を始めました。きっかけは、利用者の就労後及び親亡き後でした。

利用者の就労後と親亡き後の課題のために

まず就労についてですが、就労継続支援B型事業所「やすらぎ工房」での日中の活動を通し、就労に向けた準備を整え、満を持して送り出し就労するのですが…なかなか続きません。作業能力も高い、職場でのコミュニケーションもとれている。なのになぜ…。これは決して誰か一人の特別な状況というわけではありませんでした。どこに課題があるのかと考える中で、働く「力」というのが、職場で活動することだけにとどまらないということが見えてきました。仕事を継続するには作業能力や働きたいという気持ちだけではなく、栄養バランスの取れた食事、睡眠、継続した通院、気分転換をしたり疲れを癒す休日の過ごし方、自己認知、…様々なことが絡み合って仕事をするのに必要な基盤が作られていきます。その基盤となる生活リズムを維持することは当たり前のことのように見えて、とても難しいことです。

そして、二つ目が親亡き後の課題です。これは生活の安定にも直結します。現在、やすらぎ工房通所者の69%が親との同居、内閣府のデータでも精神疾患で通院されている方の75%が家族との同居となっており、生活の場の選択肢が少ないのが現実です。同居から突然の单身では環境の変化が大きく、親亡き後を考え当事者・家族共に将来への不安は避けて通れないものとなっています。

生活の場の選択肢を増やして----

立ち上げに当たっては、地域の方々、三木市、兵庫県には大変なお手間をおかけしました。初めてのことで右往左往し、その度多くの方に助けていただき、支えてもらっている有難さを感じました。

次は私たちがお返ししていけるよう、職員一同日々学びながら、長く安定して仕事をするためには生活の面への支援にも意識を向けていきたい、親亡き後に限らず、生活の場の選択肢を増やしたい、その一つとしてグループホームを法人として持つことで、その支えの一端になりたいと考えます。

家電製品購入のための助成金をいただきました!

公益財団法人神戸やまぶき財団様より、グループホームで使用する家電製品購入助成金(116万円)をいただき、冷蔵庫や洗濯機、TVや各部屋のエアコンなどを揃えることができました。神戸やまぶき財団様には、いつも親身にお話を聞いていただき、数々の助成でお世話になっています。大切に活用させていただきます、ありがとうございます。